

強い方が勝つという単純な事実は動かしようもない。そんな意味で、お前たちは勝者としての誇りと自負を強く持つべきだけれど、たった1日で岩西や緑陵よりテニスが上手くなったのかといえば、それはまるっきり違っている。そして、その勘違いは、お前たちの成長を完全にストップさせてしまうに違いない。だからこそ、もう一度、地に足をつけ、ダメで下手くそな自分を冷静に見つめて、それに打ち勝つ努力を続けなければならない。

勝者のエスプリ

岩見沢西との決勝戦は4面展開。気がつくやうに、並行して行われていた4試合の得点板はすべて5-1のスコアを表示していた。ただし、岩東がリードしているのはダブルス2(D2)のコートだけ。S1・D1・S2は岩西にリードを許し、1ゲームも落とせない崖っぷちに立たされていた。

無理かもしれないと思ったのは、新チームがスタートして以来、このときが初めてだった。思えば1ヶ月前、最初の対外試合となった岩西との練習試合では、この日のレギュラー7人全員が、シングルスでもダブルスでも1勝もさせてもらえなかったのだ。盤石の優勝候補が、そう易々と1年生主体のヒヨコチチームに勝ちを譲ってくれるはずがない。

最初に決着がついたのはD2。今村・堤の1年生ペアが出来過ぎの試合運びで相手を圧倒し、6-1で勝利を収めた。しかし、後がない状況には何の変化もなかった。同じコートに入って試合を始めたS3の高橋は安定していた。危なげない試合運びでポイントを重ねていく。それに呼応するように1-5ダウンの劣勢だったS1・D1・S2が勢いを取り戻したかに見えた。得点板は岩東を示す下段の数字が一つずつ積み上げられていく。行けるのか？いやいや、1ゲームも落とせないことには変わりはない。

S3高橋が3-1でリードしたところで、S1の1年生・水上が力尽きた。しかし、南北大会の優勝者でもある岩西のエースを向こうに回しての大奮闘は賞賛に値するのだ。間もなくS2の古畑が敗れ、セットカウントは1-2ダウンとなった。文字通り1つも落とせない剣が峰。そして1年生ペアのD1門田・北池も、とうとうマッチポイントを握られてしまった。やがて門田のストロークが浅く浮き、相手前衛は腰を落とした完璧なフォームでフォアボレーを待ち構えていた。万事休すである。しかし、次の瞬間、私は目を疑うほかなかった。ラケットに弾かれたボールはサイドラインを割り、フェンスまで転がっていたのだ。プレースメントを誤ったとか、力みすぎて失敗したとか、そういう次元のミスではなかった。同じボールが来たら、恐らく彼は10回のうち9回まで難なくエースを決められるに違いなかった。そしてこれを機に、流れはようやく岩東側に傾き始めたのだ。デュースを繰り返しながら、1ゲームずつ、ゆっくりと追い上げていく門田・北池のスコアは、気がつくやうに5-5になっていた。一方、S3高橋の得点板は、3-1アップからなかなか動かない。いつもながらの長いラリー。消耗戦の様相は遠目からも見て取ることができた。いずれにしても、この試合で、岩東は初めて岩西をリードしたのだ。

一度傾いた流れが戻ることはなかった。D1は、1-5ダウンから6ゲームを連取しての勝利。快挙である。しかし“こんなことは滅多にない”ことなのだろうか。いや、決してそうではないのだ。“こんなことがしばしば起こる”のがテニスなのである。私自身、

ベンチに座って“こんなこと”を何回経験したかしのれない。“こんなことがしばしば起こる”、だからこそ諦めてはならないし、どんなにリードしていても油断してはならない。それをチーム全員で経験し、学んだことだけで、この1勝の価値は計り知れないのだ。

D1が終わり、セットカウント2-2で、私がS3のコートにベンチを移したとき、高橋は4-1でリードしていた。S3勝負に持ち込まれた決勝戦のベンチだというのに、しかも高橋はマッチポイントを7回も逃しての勝利だったというのに、これほど穏やかで落ち着いた気持ちで座っていられたベンチがあっただろうか。一方的な試合だったのではない。一つ一つのラリーはとても長かったし、デュースとアドバンテージはうんざりするほど繰り返された。にも関わらず、高橋のプレーには迷いがなかった。どんなに追いつめられても、どんなに優勢になっても、夏から（と言うより8月9日の新十津川農業との練習試合の日から）取り組み始めたプレースタイルは一貫して揺らぐことがなかったのだ。一方、ストローク力で上回る対戦相手の選手は、どんな局面でも変わらない高橋のプレーに半ば精神的に追いつめられていた。ハードヒットすればいいのか？緩くつなげばいいのか？プレースメントを考えればいいのか？バックに集めればいいのか？前後に振ればいいのか？1プレーごとに球速を変え、球種を変え、プレースメントを変えて、正しい攻め方を探しているようにさえ見えた。しかし彼の試行錯誤は、迷わない高橋の一貫性にことごとく跳ね返されたのだ。

決断力 **determination**。迷わないことの重要性を、キャプテンは身をもってチーム全員に教えてくれたように思う。“テニスの試合では、迷って機を逸した正しい判断より、迷わず決断して実行した誤った判断の方が、良い結果に結びつくことが多い”……これは人生の教訓でもある。

大会前日の練習では、チームの登録順位で最下位に甘んじた海老江と佐藤がレギュラーD2の今村・堤を倒した。あの試合によって生まれた危機感がなかったとして、今村・堤は決勝戦である内容の試合を戦えただろうか。同じ日、S3高橋が1年生の折田と試合をした。高橋への私の指示は「折田が相手なら強打すれば楽に勝てるだろうが、今日は絶対に強打するな。折田を岩西のS3だと思って、どんなボールも緩く正確に打ち返し続けろ」というもの。延々と続くラリーは15分、数百ストロークに及び、折田のボールがネットにかかって試合を打ち切った時には、周囲が薄暗くなっていた。15分だってラリーを続けられるという自信が、決勝戦の高橋をどれだけ勇気づけたかしのれないのだ。

2人の2年生と9人の1年生と私を除いて、あの会場にいた総ての人が、岩東の優勝など夢想だにしなかっただろう。それどころか準優勝の全道切符だって緑陵が手にすることを疑わなかったはずだ。そして「運も実力のうち」などという妙な言葉があって、その意味では、私たちも“運”にたくさん助けられたのだ。しかし、その“運”とやらも、信じて努力を続ける者のところ以外には決して訪れないということである。おめでとう。

第5回 空知高等学校秋季テニス大会

1回戦 ○4-1 対 滝川西

S1○6-1 D1●2-6 S2○6-2 D2○6-0 S3○6-1

準決勝 ○3-0 対 岩見沢緑陵

S1○6-2 D1○7-5 S2○6-1 D2打ち切り S3打ち切り

決勝 ○3-2 対 岩見沢西

S1●3-6 D1○7-5 S2●4-6 D2○6-1 S3○6-3